

黄金町 Koganecho Pick Up ピックアップ

黄金町エリアの最近の出来事や今後のイベント情報をお知らせします！

地域のイベント

〈毎月27日〉防犯パトロール (15:00 黄金町交番集合)

はつこひ市場

黄金町のローカルシェ「はつこひ市場」を開催します。

会期 3月26日(日) 11:00 ~ 15:00

会場 高架下スタジオ Site-D 集会場、かいだん広場 ほか

詳しくは初黄日商店会のWEBサイト等で案内予定

協議会設立20周年記念事業

今年、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会は設立20周年を迎えます。記念事業の開催に向けて、実行委員会が立ち上がりました。記念事業は秋に開催予定です。

アートイベント

Artist's Network FUKUOKA 2023 [第二部]

福岡の若手アーティストを紹介します。

会期 3月10日(金)~26日(日) 月休 時間 13:30 ~ 19:00

会場 高架下スタジオ Site-A ギャラリー ほか

のきさきアートフェア

アーティストやクリエイターのオリジナルグッズが並びます。

日時 3月26日(日) 11:00 ~ 15:00 会場 黄金町高架下広場(ロックカク)

オープンスタジオ

黄金町レジデンス・アーティストのオープンスタジオを開催します。

日程 3月中旬~4月中旬(予定)

詳しくは黄金町エリアマネジメントセンターのWEBサイト等で案内予定

黄金町まちづくりニュース

vol.136 2023年3月号

ぷらり あんな店こんな店



愛知屋

戦時中配給所だった場所に昭和37年11月24日に酒屋ができました。それが愛知屋で、現在3代目萩生田店長が店を継ぎ、今年60周年を迎えた赤門町の老舗です。「コロナ禍で大変ですが、お店の中で居酒屋もやっており、更に色々と厳しい状況です」と苦笑い。その居酒屋は、元は立呑みだったのを今はカウンターで飲むスタイルになりました。お酒の一推しは鹿児島島の焼酎で佐田岬、蔵薔、川内川。今後は、「また地域の人達に喜んでもらえる様なお店にしていきたいです。お店に来て一杯飲んで、自分の好みのお酒を探してみてください」とのことです。

黄金町エリアマップ



地域連携防災 炊き出し訓練 を開催!

11月20日(日)に横浜日ノ出棧橋前で、地域連携防災炊き出し訓練を開催しました。当日は、石川町からのプレジャーボートによる物資輸送、炊き出し、スタンディング消火器の放水、Eボート乗船清掃訓練などを実施しました。

「地域連携防災炊き出し訓練」は、遡ること平成元年(1989年)から3町内(日ノ出町、初黄町、赤英町)の地域での防犯防災の周知を目的に行われてきた行事です。当初から各町内での役割を取り決め、機材道具は日ノ出・赤英町で、食材は初黄町で用意し、「地域が連携協力して事にあたる」を継承してきました。

今回の訓練は、地元の3町内に加え、数年前から大岡川流域での繋がりがあがる「石川町打越地区町内会」様が、災害時の物資輸送を広めるために、新たに「元町自治運営会」様も船で連れてきていただきました。また、大岡川を挟み対岸の「長者町7・8・9丁目町内会」様もご挨拶に駆けつけて下さり、来年以降連携協力して参加させていただきたい、との意向も表明されていました。

横浜市・中区役所・県治水事務所・中消防署・警察署及び地域消防団員やEボート倶楽部の協力等と議員の先生方からもご挨拶いただき、年々近隣に認知され規模も大きくなってきています。

できれば来年は、「子供」を多く参加させた形式とチャレンジしたいですね。

また、今回は天候が崩れる予報もある中、炊き出し訓練に参加協力いただいた方も増えてきており、用意した食材を調理して、おにぎり、豚汁を各150食分をフードロスを出すことなく、来ていただいた方々に配給する事ができました。今後本炊き出し訓練の手順をマニュアル



絵：竹本真紀

化して地域の皆さんとで活用できるアイテムになればいいですね。

最後に、「希薄化しつつある地域の繋がり」が少しでも広がり、多くの地域と連携が取れ、本当に災害が発生した際に慌てず、被害を最小限にできる地域である事を、今後の若い方へ継続していただければ幸いですし、そのためにも地域の皆さんで協力しあって活動できればと思います。

古老に聞く②

前回の「古老に聞く」①では、このまちに長く住み、まちのことは何でもご存じの方々に、こども時代の様子をお聞きました。今回は、その後の戦時中、戦後の記憶を辿っていただきました。



語り手：中澤秋子さん(昭和10年生まれ)、長門石里子さん(昭和13年生まれ)、角田陽之介さん(昭和5年生まれ)、角田静子さん(昭和6年生まれ)、一ノ瀬成和さん(昭和18年生まれ)

聞き手：広報イベント部会 秋成、浅野、佐野

中澤(以下 中)◆戦争はいやだ。横浜空襲があって、東小に逃げたひともいたけど焼けちゃったね。このあたりが焼けてしまった。人を殺し合う戦争は、こりこりだ。

長門石(以下 長)◆私は北海道へ移民した後、横浜がどうなってるか戻ったら、焼け野原に煙突だけが残ってた。この辺りは、全部ブラックよ。

一ノ瀬(以下 一)◆逃げて川に飛び込んで亡くなったひとも相当いる。東小もすごかったんだ。どこに逃げても助かるかはわからない。川の橋のところの防空壕にも行ったらしいよ。いま公衆便所がある反対側のところにあったらしい。

その後、アメリカ軍による接収があり、川向うに飛行場があって、よく飛行機が飛んでいたのを覚える。成田山の丘から見ると、カマボコ兵舎や進駐軍に占領された風景が見えたね。長者町のあたりは、米軍に接収されキャンプもあって、その頃いろんな人間が京急のガード下に勝手に入り込んできた。

角田(以下 角)◆その頃、子神社は歴史のある神社で広い土地を持っていたが、その後、土地を切り売りして敷地が狭くなっていったらしい。子神社のそばにあった教会が、戦争孤児たちを世話する野毛ボーイズホームとなった。

中◆いづろ今みたいなガード下になったかわからないけど、誰かがバーを開いて、それからいろんな人間がいろんな商売をするようなことになってきた。結構ここからも、こどもたちが学校に通っていた。

一◆勝手に入り込んできた人もいなくなって、その後派手な女性たちがいるようになった。

中◆ちょっとピンクの服を着てるだけで警察に連れていかれた近所の娘さんがいたよ。

一◆ま、戦後からある意味、ここではいろんな商売が成り立ったん



ガード下のこども達(日ノ出町付近/昭和27年頃/奥村泰宏撮影/横浜市都市発展記念館所蔵)

だろうね。まあ、この先よくなっていくといいと思うよ。米軍の接収で商売も変わったけど、この辺りは今ではない賑わいがあったね。

長◆かまぼこ兵舎もいっぱいあったよね。私がまだ高校のとき、伊勢佐木町も接収され、若葉町にも(かまぼこ兵舎が)あったんですって。あの辺りに長屋いっぱい持っていたらみんな焼けちゃって、収入がなにもなくなっちゃって、その土地買って住んじゃえばその人のもの、なんてね。

中◆ダンボール屋さん、箱屋さんなんかがあって、ダンボールの山があった。飾り屋さんもあった。

秋成◆昔の阪東橋、今みたいになる前は闇市みたいなのがいっぱいあった。その前に、歌舞伎座があって、戦後闇市になって、焼けて、その後建ったビルに公園とショッピングセンターが入ってた。

角◆接収が解除になって、野毛山公園遊園地ができて、伊勢佐木町もにぎわって、阪東橋に市場があったね。

中◆野毛山プールもできて、すごい選手が来たよね。遊園地にくるくる回る飛行機やお化け屋敷もあったよね。横浜博覧会もあった。横浜を発展させようと、スケートリンク作ったり、野毛山動物園作って入場無料にしたり。餌代や飼育員さんに感謝の募金もすごかった。川が流れて、美しい野毛山があって、便利なダウンタウンがあり、買い物は伊勢佐木町、そんな素晴らしいまちだった。

昔の苦労は今あることの感謝。乗り越えてきたから今がある。感謝だよ。



まちの歴史を知る5人の方から、とても貴重なお話を聞くことができました。中澤さま、長門石さま、一ノ瀬さま、角田ご夫妻、ありがとうございました。



横浜市立東小学校創立100周年記念誌「あずま」から

日本の無条件降伏によって、戦争の時代は幕を閉じましたが、大空襲によって焼けた横浜には、占領軍が入ってきました。(中略) 関内の焼け跡などには、カマボコ兵舎が建ちました。3万人近い兵員を収容するために、横浜の中心部の建物に接収されました。伊勢佐木町通りの裏には、飛行場が仮設され、米軍機が物資を輸送するための発着地となりました。

A Small, Good Thing

ー積み重ねることによって生まれることー

2022年11月25日~12月11日の期間、Site-Aギャラリーにおいて開催された展覧会『A Small, Good Thing ー積み重ねることによって生まれることー』。本展は作品に加え、それらが完成に至るまでに描かれたスケッチ、綴られた言葉、取り集められた写真、そして切り捨てられた断片など、制作において費やされたプロセスも同時に展示するという試みでした。参加作家は黄金町で制作活動をする7名。ここでは、それぞれの作家がどのようなプロセスやそこから生まれた作品を発表したかをお伝えします。



近あづき

『Ephemeral wall 1560mm』2021、『Diary』2021.2022

編み物の手法を用いた立体作品で知られる近。今回は、2020年の黄金町バザールで発表した『Ephemeral wall 1560mm』という作品の展示とともに、それが完成に至るまでに起きた制作にまつわる経緯をすざろく形式で発表。展示会場や設置方法をめぐる当時のキュレーターとのメールでのやり取りをはじめ、作品へとつながったサンプルのような小作品、そして1ヶ月半費やしたという制作期間において出たのと同じ量のニットのゴミを展示した。



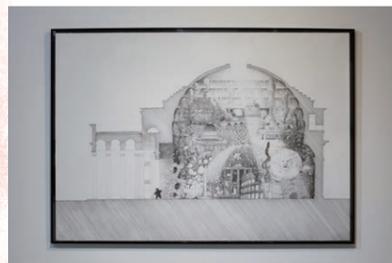
寺島大介 『無題』2022

真っ白なキャンパスだけでなく、私たちの日常を取り囲むさまざまなものを土台としてドローイングを描き続ける寺島。今回は、老舗百貨店のタカシマヤの紙袋をスタート地点にした平面作品を多数発表。誰もが一度は目にしたことがあるであろうバラ柄の紙袋が、アクリルや水彩、色鉛筆などを使った寺島による色彩豊かなドローイングと調和することで大小様々な作品へと変化していく。



キム・ガウン 『記憶の門、ローマ』2021

キムが、2007年にイタリアのローマに住んでいた時代の記憶や想いを一つの空間にまとめて描いた作品『記憶の門、ローマ』。当時、キムは建築の勉強をしており、人の生活と空間をどう結びつけるかを試行錯誤していたという。その時の手がけたドローイングやイメージも同時に展示。本人曰く、今回の展示で、当時考えていた問題意識と、画家になった今自分が考えていることが地続きであるということを再認識したとのこと。



SUZUKIMI 『astragalus色の空』2022

以前、ゴミじゃないものがゴミになる境目に興味を持ち、生ゴミ以外は捨てる前に解体して素材として使っていたことがあるというSUZUKIMI。今回は、その際にストックしていた牛乳パック、ペットボトルのキャップ、プラスチックの容器、そしてお米などを素材としたインスタレーションを発表。朝日あるいは夕日、そして作者がそこに存在しているであろうと想像する天使をイメージし、ピンク色に空間を彩っていた。



神田茉莉乃 『思考への位碑』2022

学生時代、建築を学んでいた神田は卒業後、彫刻という新しい表現手段を見つける。今回は、その彫刻を志した最初期に制作した作品と、建築を学んでいた際に自身が使っていたノートのコピーを同じ空間に展示した。学生時代に学んでいた建築という世界と自身が目指す表現の方向性の間での葛藤、そしてその煩悶を超えた上で生み出された彫刻という作品が織りなす軌跡。



平山好哉 『ダイアログ』2022

本展に参加するにあたり、普段の制作で無意識にやっていることを意識的にやってみることにしたという平山。平山にとって、作品のアイデアは他者との対話の中で生まれることが多いといい、それに着目し友人とテーブルゲームをしながら話しているその状況自体を映像作品としてまとめた。ただゲームをする者の顔や会話は映っておらず、ゲームに興じる(必ず最後は失敗する)手の様子だけがそこには映し出されていた。映像に加え、制作のためのメモやスケッチをまとめたファイルも展示。



副島しのぶ 『Blink in the Desert』2021

10分32秒のアニメーション作品。個人の作家がその長さのアニメーションを制作するためには1年から2年の月日を費やすと副島は言う。本展ではアニメーションに加え、制作中のメモや絵コンテ、そして作品で用いられた実際の人形などを、副島本人が普段制作で使用しているものと同じ机を用いて展示した。アニメーション制作という気の遠くなるような作業が、どのようなプロセスを経て完成へと至るのか。作品とはやはり、積み重ねることによって生まれること、なのである。

